名古屋大学陸上部ＯＢ会月報(第１５号)

2008. 10. 21 発行

目次

１．熱かった七大戦 ～2008 年 夏の陣～　柳原南欧美（H20 医）
２．七大戦観戦記　熊代　哲也（M1 工）
３．七大戦を観戦して　安田　理香（H20 理）
４．一橋戦観戦記２編
①３年ぶりの２校対校戦　大島　純一（H10 法）
②一ツ橋戦観戦記　勝木　　誠（S51 工）

１．熱かった七大戦　～2008 年　夏の陣～　柳原　南欧美（H20 医）

初めてＯＢとして参加した七大戦。期待と不安を胸に、仙台の競技場へと向かいました。私たちの代は運にも恵まれ、名大史上初のアベック優勝を果たしました。そのときの興奮は今でも忘れません。そんな私たちの姿を見ていた後輩たちには、計り知れないほどのプレッシャーを与えていたと思います。けれども、「皆、さぞかし緊張しているだろう」という私の心配をよそに、競技場で準備をする部員たちは、とても晴れやかな顔をしていました。この日のために精一杯やってきた、そんな彼らの頑張りから出てきている表情を見たとき、「この子たちは、きっと素敵なドラマを見せてくれるに違いない」と、感じたのです。

今年の順位予想は、男女ともに２位。けれども、選手たちはそんなこと気にせず、アベック連覇を目指し、全力を尽くしていました。序盤から、予想とは大きく異なる試合展開となり、どの大学が優勝するか、全くわからない状態に。もちろん、名古屋大学にも優勝の可能性は十分にありました。応援席にいる私の声も自然と大きくなり、座っている席も徐々に前へ移動。気分はもう、現役時代に戻ったかのようでした。

柳原さん（宮城野原競技場にて）

選手もＯＢも一丸となって、競技し、応援し、努力した七大戦。今年は、他大学も成長しており、あと一歩及ばず、男女ともに優勝を逃してしまいました。しかし、彼らの頑張りは本当に素晴らしいものでした。普段の練習以上の結果を残せた者、調整がうまくできず、不本意な結果に終わってしまった者、選手に選ばれず、サポートにしか回れなかった者、

その誰もが、一つの目標に向かって、皆で一つのチームとなって戦うことができた、そのことこそが、彼らの生涯の糧になったにちがいないと思います。

私は今年から社会人となり、社会の厳しさを痛感する毎日を過ごしています。やはり学生と社会人とは全く違い、そのことにとまどいも感じていましたが、七大戦で心の底から一生懸命努力する現役生たちを見て、「まだまだきっと、私も頑張れる」と、勇気付けられました。私も、現役時代に彼らに負けないくらい努力していたはず。そのことを、彼らが思い出させてくれました。

今年の七大戦はもう終わってしまいましたが、これで引退してしまう部員たちにとっても、次の世代を担う部員たちにとっても、そして、私たちにとっても、ここからがまた新たなスタートだと思います。この日の努力を胸に、皆、次のゴールへと向かってそれぞれ歩き始めていくことでしょう。私も、またここから、彼らに負けないように成長していきたいと思います。

２．七大戦観戦記

熊代　哲也（工Ｍ１：前々主将）

現役続行の熊代前々主将

昨年、京都でのアベック優勝から１年。後輩達は東北での七大戦を楽しみにしつつも、男女アベック連覇というプレッシャーを感じていたようだ。昨年度私は学部を卒業したが大学院に進学し競技を続けており、学部生と共に練習をしている。そのため七大戦を控えた学部生の緊張感をよく知っていた。私の所属がフィールドパートということもあり、フィールド種目を中心に観戦、応援をしてきた。個人的に記憶に残った種目ばかりになると思うが、今年の七大戦を振り返りたいと思う。

東北ということもあり、最近開催された九州、京都、大阪に比べると、涼しい気候の中試合が行われた。序盤の種目である男子走幅跳では東海インカレ覇者の山田（工３）に優勝が期待されていた。しかし１，２本目にファウルをしてしまい、後のない３回目に７ｍ１２を記録し２位に付けた。ベスト８では記録を伸ばすことができず２位で競技を終了した。６月の試合で足を痛めていて、完全な状態で試合に臨めなかったが、２位という成績を残した山田の活躍により全体に活気着いたように思える。十種競技を専門とする西川は走高跳、棒高跳、砲丸投、円盤投、やり投、110mH に出場した。しかし多種目出場により１日中フル活動の中、熱中症によりダウンしてしまった。そのような中でも円盤投、やり投でしっかり得点した。結局男子フィールドでは走幅跳、やり投、円盤投の３種目のみでしか得点が取れず、フィールド総合８点の６位に終わった。

女子砲丸投では、小中(医１)が３連覇中の九大の青山に挑んだ。３投目まで青山に圧倒されていたが、４投目に自己記録を上回る１１ｍ３５を投げ逆転、そのまま優勝した。この記録は大会記録を１ｍ以上更新する大会新記録、そして名大新記録であった。女子フィールドではこの小中の得点のみで、フィールド総合４点の２位であった。

フィールド種目以外でも、記憶に残った競技について振り返りたい。男子 800m では加藤(工４)、早川(経３)、井上(工２)がエントリーし３名とも無難な走りで予選を突破した。決勝では東海インカレで名大新記録を記録した井上に優勝が期待されたが惜しくも３位だった。東海学連幹事長を務める加藤は、今期不調ながらも意地を見せ６位に入り１点をもぎ取った。また男子 400mH では牧(医５)が４年ぶりとなる優勝を飾った。そして何よりも、中山(理４)が男子 100m、200m、4×100mR で 3 冠を達成したことは、大きな感動を与えてくれた。この１年間での短距離の成長は著しく、中山以外にも見置(工４)、山崎(工２)が得点を稼いだ。

男子フィールド種目では、昨年大量得点を稼いだ私や山村、松尾が抜けたために、得点が伸び悩んだ。特に投擲種目では東北大学に上位を独占され、ほとんど得点を取ることができなかった。しかし１年生にして七大戦を経験した奥谷、中野、中川、徳永、永盛、藤田らの来年の七大戦での活躍が期待される。女子フィールド種目では、大会記録を記録し４連覇が期待される小中に加え、七種競技の寺田ら２人の１年生の今後の活躍が楽しみである。

総合結果としては男子４位、女子２位とアベック連覇という目標は達成できなかった。しかし、今年初めて七大戦を応援する立場から見たが、選手の活躍を見て何ものにも代えられない感動がもらえた。今から来年の東京の七大戦が楽しみである。

３．七大戦を観戦して

安田　理香（H20 理）

ＯＧとして見る初めての七大戦でした。一番長く活動を共にした４年生の最後の七大戦をどうしても観戦したく、無理矢理スケジュールを調整し強行日程で仙台入りしました。私服姿で、スタンドから競技を観戦しているだけの自分の姿に少し寂しさを感じながら、後輩たちの姿をじっくり見させてもらいました。この１年で、いろいろな面でとても大きく成長していたと思います。選手・応援・サポート、あらゆる面でいいものをたくさん見ることができました。みんなキラキラ輝いていたと思います。

男子部は、初の連覇という大きな目標に向かってチーム全体が燃えていました。このチームをまとめてきた主将・田中は責任感がとても強く、個人種目では主将として 1 点でも多く獲ろうと奮闘し、その一方で、応援・サポートをす

るべく誰よりも積極的に競技場内を駆け回っていました。そんな田中の熱意・力量が部員の心をつかんでいたのでしょう、田中主将に対する部員たちの信頼はとても厚く、私が言うのもおこがましいですが、近年では１，２を争うくらい部員に慕われる主将でした。団結力は七大学でもトップクラスだったと思います。また個人的には、中山・見置・木原といった短距離勢の大活躍がとても嬉しかったです。長い長い冬を越え、最後の最後に大きく花開いた姿に、思わず鳥肌が立ち、涙が溢れそうになりました。素晴らしかったです。

女子部には、史上初の７連覇という使命が課されていました。主将・安川には、女子部 6 連覇という輝かしい歴史が、逆に大きなプレッシャーとなって重くのしかかっていたことと思います。そのなかで、苦しみながらもよくここまで頑張ったと思います。女子部をまとめ上げ、前評判どおり 2 位を死守できたのは、この 1 年、安川を中心に苦しみながらも「勝つためのチーム」を作り上げてきた女子部みんなの努力の賜です。いかに点数を獲るか、いかに最高のパフォーマンスをするか、いかにチームを盛り上げるか。昨年以上に女子部一人ひとりが意識を高く持っていました。みんなの頑張る姿、とても素敵でした。また、今回はお世話になった小山先輩の最後の七大戦でもありました（このことも仙台へ行く大きな理由のひとつでした)。現役時代、小山先輩の存在に私自身がどれほど救われたかわかりません。七大戦ラストランである 3000m は、しっかり目に焼き付けました。先輩らしい、闘志あふれる圧巻の走りだったと思います。心からお疲れ様でした、ありがとうございましたと言いたいです。

もっと頑張れたのでは、もっと点を獲れたのでは、という気持ちはあると思います。でも、今回の結果が今の力です。みんなよく頑張りました。今回以上の記録を出したいならば、これから 1 年かけて地力を上げるしかありません。下の世代は今回の結果をきちんと受け止め、次に向かってしっかり頑張ってほしいと思います。

現役時代、OB の皆様からよくいただいた言葉「選手の活躍が自分の励みになる」を、今回の七大戦でよく理解することができました。素晴らしかったです。これからも、名古屋大学陸上競技部がますます発展しますように、心から応援したいと思います。

理科実験中の安田理香さん

４．一橋戦観戦記２編

①「３年ぶりの２校対校戦」　　大島　純一（H10 法）

３年ぶりに２校対校の一橋戦に参加しました。参加というのは、応援＆オープン出走ということです。競技の方は散々でした。病み上がり＆故傷明けということで、ご勘弁を。

七大戦を含めて、ちょくちょく顔をだしていますが、最近の現役の対校戦に関して、感じたことを記します。一番感心するのは、応援体制がしっかりしていることです。体制だけでなく、部員の意識が高いです。ポイントが近づくと、自然と手すきの人は集まって、隊列をきちんとなして応援スタンバイします。また昔はゴーゴーレッツゴーの音頭は特定の人でした。でも今は、先輩から指名がかかると、誰でもこなします。当然、応援の声も力強いです。これは部員数が増えたのも大きいと思いますが、みんなの意識が高くなったということだと思います。

ただ残念なのは、昔は２校対校って、基本的に負けない、負けないつもりで勝負にこだわるって感じだと思っていましたが、現場で見て、正直、勝ちにこだわってないと感じました。掲示板で「惜敗です」と書かれていても、実際のところ、レースへの気迫が希薄です。特に一橋戦などは新チームで主力を温存していることもあると思いますが、七大戦で勝とうというチームは２校対抗で負けてはいけないと思います。ただ、いろいろ事情もあるかと思いますので、現役次第でしょうが。

でも一番残念なのは、観戦に来るＯＢの少なさですね。東京支部所属なので名古屋開催の時の状況は正直知らないのですが、今回はオープンに参加しに来た若手ＯＢ以外では、勝木さん（S51 工）のみでした。これはＯＢの側にも問題がありますが、報告・部報に応援に来たＯＢの名前を載せなくなったことに起因すると個人的に分析しています。とりあえず、現役マネージャーに載せて貰うようお願いしておきました。もっと多くのＯＢが応援に来る様に、何か微力ながら手を打って行きたいと思いました。

そうは言っても、現役の試合を生でみるとやはり頑張ってもらいたい気持ちが高まります。現役にはＯＢを熱くさせる頑張りを期待したいと思います。

今も現役大島君（サロマ 2007）

②「一橋戦観戦記」　　勝木　誠（S51 工）

台風一過の奇跡的な好天の土曜日、久しぶりに一橋戦の観戦に大井まで出かけた。午後からの観戦であったが、若い人たちの一所懸命走る姿に心地よさを感じた。残念ながら現役の諸君は顔と名前が一致しないが、最近メイクラ関東支部で駅伝などに参加させていただいているお陰で、何人かの顔見知りの若手ＯＢがおり、雑談しながら楽しく観戦できた。

試合は残念ながら男女とも名大の敗戦であった。閉会式の時にグランドに両校が整列した時、他校の学生が含まれているとはいえ、名大側が約１００名、一橋側が約３０名の現実を見た時、“この戦力差で負けて悔しくないのかな？”という素朴な疑問を感じた。

今年の一橋戦が第３８回、第２回から第５回の黎明期に参加したＯＢから見ると、“せっかくの伝統ある対抗戦なのだからもう少し勝ちに拘っても良いのでは”と思うのは間違いなのだろうか。

ハーフマラソン出場の勝木さん（左）
（増田明美さんと）

編集後記

たいへんご無沙汰しておりました。「人生いろいろ、会社もいろいろ。」と言った元首相は引退しましたが、確かに種々の場面でいろいろな事に出会います。その度にエネルギーを消耗し、落ち込んだりするものですが、幸い最後のところで踏ん張れるのは陸上競技で培われた何かが背中を押してくれているからでしょう。

さて久しぶりの月報は対校戦の観戦記を特集しました。まず８月の七大戦は新ＯＧの柳原さんと、もう先々代になる元男女主将にお願いを。ただし熊代君は厳密にはＭ１の現役ですが。そしてもう一つ９月の一橋戦。こちらは東京支部とメイクラ関東支部で活躍中の大島氏と今も走っている勝木氏という、フレッシュな執筆陣でした。

紙面の都合で言い訳ですが、編集子も一橋戦へ出張先の鹿児島から直行予定の所、台風 13 号の影響でスケジュールが乱れ参加できず。残念！

その代りでもないですが、今月 4 日（徒歩の日）に多摩川ウォーキングフェスタの 30km ウォークに参加。完歩しましたが 42.195km を 2 時間台で走ることの偉大さを‘痛’感です。参考までに、6 時間 20 分かかりました。

本月報へのご意見やご投稿、ＯＢ会へのご連絡は下記アドレスへ。
nagoyaunivtrack_field@yahoo.co.jp